

編 集 後 記

今月号のテーマはある意味では意地の悪いものである。実際に書かれた方たちは従来漠然とした考えはあったとしても、いざ症例を集め整理してみると厳密な意味で高位に入れてよい症例はどれか、更には高位とはどこだというような疑問が出、万人が共通に話し合える胃の特に上部の各部位をあらわす言葉のないことを感じられたことと思う。今後、早期癌分類のような簡明で解りやすい言葉で統一されることが望まれる。

しかしその前に高位をも診断しようと努力することは、結局胃の中をすべて診断しようということ、即ちどこに病変があっても探し出せるぞということに通じるのではあるまいか。高位も、もう特別の場所としてではなく、日常検査の中に必ずその病変をも見逃さないような方法を組入れることが大切で、その意味で本号は読者の皆様に必ずお役に立つものと思う。

たまたま本号に掲載された T. Schops の論文抄録およびその文献からは、外国における噴門部への関心、現状等が窺え、興味あるところである。

前号では綜説として微小胃癌がとりあげられた。これで現在の設備でも 1 cm 以下の胃癌が胃の中どこにあっても見付け出す足掛りはできたことになる。あとは日常診察する患者さんの 1 人 1 人にファイトをもち、更に明日への命題へと向うことであろう。

< 芦 沢 真 六 >